



21世紀も20年目に入り、令和の時代を迎えました。この間、IoT や AI などをはじめとする科学技術は劇的な発展を続け、社会のあり方や人類の生活に、第4次産業革命とも呼ばれる大きな変化をもたらしています。他方、マイクロプラスチックなどの環境汚染や気候変動、不安定な社会がもたらす難民、あるいは日本の直面する少子超高齢社会など、人類社会は大きな課題を抱えています。あらためて今、科学の果たすべき役割、目指すべき姿を問い直す時期が来ているのではないのでしょうか。

1999年のブダペスト宣言から20年の節目の会合として、ワールド・サイエンス・フォーラム2019が昨年ブダペストで開催されました。JSTからは佐伯理事、渡辺副理事、私が招待されて登壇し、今後の科学研究が希求すべき価値として、人類社会のウェルビーイング（社会的に健康で豊かであること）が最も大切であると主張してまいりました。この主張は、会合で採択された科学の倫理と責務に関する宣言の第1章に取り入れられました。世界の科学をより良い方向に導く責務を日本は期待されていると、私は感じています。

科学の果たすべき役割は今後もますます重要になっていきますが、一方で昨今の日本の科学技術力を示す各種データからは、破壊的イノベーションへの挑戦、基礎科学技術力、産学連携、人材育成など、さまざまな面での課題が明らか

になってきています。将来にわたって日本が世界の科学技術をリードし、全ての人々の幸福のため、そして未来のためのイノベーションを創出すべく、JSTは科学技術基本計画の中核的な役割を担う機関として、これからも新たな挑戦を続けていきます。

その新たな取り組みとして、いよいよ今年、「ムーンショット型研究開発事業」と「創発的研究支援事業」が本格的に動き始めます。ムーンショット型研究開発事業は、従来技術の延長にない、より大胆な発想に基づく挑戦的な研究開発を推進します。その構想の下、昨年末にムーンショット国際シンポジウムを開催し、多数の有識者に目指すべき未来像と取り組むべきムーンショット目標を議論いただきました。創発的研究支援事業は破壊的イノベーション創出を目指し、幅広い人材に長期にわたって挑戦的課題に取り組んでいただくもので、2019年度の補正予算で措置される予定です。

従前からのプログラムに加え、これら新規の事業に取り組むことで、JSTは急速に変容する社会に対応し、日本にイノベーションをもたらす新たな潮流の起点となる独創的なネットワーク型研究所として、科学のあり方を問い続け、さらなる変革に挑戦してまいります。引き続き、皆様のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

令和2年1月

濱口道成